

私のボランティア活動史

鈴木 真知子

Abstract

I have been involved in some kinds of volunteer activities for about 40 years, from my schooldays to the present. When I was a young teacher, I was occupied with my clinical work all day, and had little time to spend for some volunteer work; however, I had begun to attend the promotion committee of the welfare village built in Kurisawa, when the children I had taught before had already grown up. Around that time, I just began the activities of the Hokkaido Academy of Special Needs Education with some volunteer people, and have been working as a secretary of this academy, the aim of which was early identification and early remedial teaching. I have been involved in both roles for 30 years. After my retirement, I began to work as a volunteer for Sapporo UNESCO, with which I have new connections, and started learning all over again.

Here, I will present the various experiences and ideas I have received through the many years of my volunteer activities.

はじめに

このたび、学生時代から現在まで続けてきたボランティア活動をまとめてみようと思い立った。藤の保育学科では、ボランティアが実習に先だって義務付けられているが、学生時代のボランティア活動は、それ以降の進路に大きな影響を与えることが多い。私の場合もまさにそうであった。たくさんの人と出会い、ともに活動し、喜びを分かち合い、その過程で、素朴に疑問が生まれ、その疑問を解決する活動でまた、新たな出会いと疑問や活動が生まれた。この様々な体験を積み上げきた道程が、私のこれまでの人生である。この道程を、時代の流れと対応させて整理したいと考えた。だが、私のボランティア活動の背骨ともいえる北海道乳幼児療育研究会のたち上げとこれまでの運動の経緯、北海道立福祉村建設委員会の40年に及ぶ運動に関しては余りにも膨大で、今回はその部分は項目を起こすだけとし、青年期、成年期の単発のボランティア活動を中心に書くことにした。

1) 第一期学生時代：ボランティアのことは意識し始めた頃

1968年、北星学園大学福祉学科に入学した私は、大木道子さん(大学同期生、元都立養護学校教諭)に出会った。大木さんは、私にボランティアをしようと誘ってきた。ボランティアが何を意味するのかわからないまま、一緒に忍博次先生(北星学園大学教授)の研究室を訪れボランティア先を紹介してもらった。札幌市立かしわ学園である。当時は、学校教育は義務化されていなかったのかしわ学園は、年少児から18歳までの園生が通園していた。私たちは、通園職員の指示に従って園生の活動を見学した。帰り際、太っていて顔は皺くちゃで一見お爺さんのようにみえた男性がよたよたと近づいてきた。思わず、気味が悪くて後ずさりしてしまった。後で聞いたところでは、ダウン症の方で、年齢は18歳の私より若い人だった。とても、恥ずかしかった。こうしてかしわ学園に一年ほど通った。そのうちに、忍先生から、クリスチャンセンターに設置された家庭相談室でのボランティアに誘われた。私は、クリ

スチャンセンター家庭相談室のボランティアを始めた。この4年間のボランティア活動の中で、様々なことを学んだ。例えば、知的障害児にはことばの障害をもつ子どもたちが多かった。私は言語障害の原因と治療に関心を持って北海道教育大学言語障害児教育教員養成課程に進学した。そこでも、私の何故は解決しなかった。しかし、言語課程を修了後、道立札幌肢体不自由児総合療育センター（以下札幌療育センターと略す）に言語指導員として入職することになった。

2) 入職から10年（早期発見・早期療育の道）

入職したものの、脳性麻痺の言語障害に関して全く医学的知識はなく治療どころか指導法すら思いつかない暗闇の中を手さぐりでそろそろと歩いているような状態であった。この状況は全国的にどこも同様であり、全国の肢体不自由児施設で脳性麻痺の言語治療に従事するST仲間がたくさんできた。何かと電話で、学会でお互いの思いや情報を交換した。当時は、ボバースアプローチ、ボイタ治療が隆盛で、早期発見・早期療育をすれば脳性麻痺は劇的に良くなるといわれていた。私もその流れに巻き込まれ、ボイタ治療やボバースアプローチを真剣に学んだ。その嵐の中で、奈良の施設で始まったわたぼうしコンサートを手掛けた人達に出会った。

わたぼうしコンサートイン札幌 1978 開催までの経過

わたぼうしコンサート：30代に入る手前、友人の笹本裕子さん（当時旭川児童相談所児童福祉司）が、わたぼうしコンサートのボランティアをしないかと声をかけてきた。

わたぼうしコンサートは奈良で始まった。脳性麻痺児者の詩に市井の方が作曲し、広く市民に呼び掛けてコンサートを開くという運動であった。彼女は、当時、旭川に転勤してきたNHKアナウンサーから、わたぼうしコンサートについて話をきいて北海道の地にわたぼうしコンサートを開きたいと考え、大学の先輩・同期・後輩に呼びかけたものであった。彼女の呼びかけに呼応して、札幌で数度の学習会を開き、開催することを決めた。実行委員会を立ち上げるため、口コミで協力者を募り、札幌療育センターの親しい友人3人にも協力をお願いした。奈良の実行委員会の開催手順に従って、各関係機関に後援依頼に回った。北海道、札幌市、北海道教育委員会、札幌市教育委員会の後援を取り付けた。この過程でSTVの後援も得た。STVの上田さん（当時、坂本九の「サンデー九」を担当していたディレクター）が、坂本九の番組で取り上げてくれることになった。このような、バックアップを貰って、歌詞募集のため札幌近郊の養護学校、施設に応募依頼をした。国立小樽病院、山の手リハビリ、山の手養護学校、真駒内養護学校、手稲養護学校、星置養護学校、札幌養護学校、手稲のみ会などから応募をいただいた。応募の中から歌詞を選考し、歌詞に曲をつけ、歌ってくれるボランティアの公募を行った。たくさんの方が作曲ボランティアに応募してくれた。その応募曲の中から、本番に演奏する曲を選びだすためのオーディションをSTVのスタジオで行った。こうして選考され作曲された歌詞の中に、佐藤喜美代さん（当時、札幌療育センターに入院中、ベンチレーターをつけた状態だった。後に、ベンチレーターの会を立ち上げ、札幌市で自立生活を始めた。女性週刊誌にも、ベンチレーターをつけた障害者が飛行機で渡米したエピソードや養子を迎えて育てているなどについて取り上げられている）がいた。上田さんの肝いりで、喜美代さんが坂本九の番組に取り上げられた。札幌療育センターの彼女の病室に坂本九が訪問し、インタビューしたものが放送されて、喜美代さんは時の人となり、わたぼうしコンサートは一気にフィーバーした。

1978年 夏 このような経過の中で、奈良で始まったわたぼうしコンサートは札幌に飛んできてSTVホールで開催された。多くの障害児者を招待し、盛大に行われた。しかし、第一回だけで終わった。主力になって活動した札幌療育センターの仲間たちは、期間限定の単発活動という気持ちで頑張ったので、エネルギーが枯渇したというのが真相であった。

このコンサート開催、実行委員会の立ち上げと運営に関わったことは、それ以降の様々な企画・運営に大きな学びとなった。

3) 30代後半から50歳（早期発見・早期療育のシステム化）

・早期発見早期療育推進事業&北海道乳幼児療育研究会

1970年代は、脳性麻痺児の早期発見・早期療育のシステム化に向けて動いていた。北海道は移動療育センター事業を立ち上げ、全道的に支援を開始した。この時期に、行政がシステム化、事業化した早期療育を人・マンパワーで支えようと、伊藤則博先生（当時北海道教育大学旭川分校幼児教育学科教授）が中心になって、1987年、北海道乳幼児療育研究会を立ち上げた。私は、立ち上げから現在まで裏方事務局として約30年活動を続けてきた。

・道立福祉村建設&北海道福祉村建設推進委員会

1979年、道は、脳性麻痺者の終の棲家として道立福祉村を建設し約350人を入村者として受け入れて運営にあたった。この福祉村建設のために、1966年に北海道重症者福祉村建設推進委員会が設立され運動が推進された。村が建設された以降も推進委員会と名前をかえて村の運営を後援する運動を続けてきた諸先生に出会った。佐藤利明・平川恭巳先生（元真駒内養護学校教諭）である。平川先生に誘われて、福祉村推進委員会に加わった。私が関わってからでも30年がゆうに過ぎたが、現在まで、たゆみなく運動は続いている。

4) 50歳から60歳まで

JICA チリ：国立INPAC病院におけるST支援について

JICA派遣事業、チリ共和国身体障害者リハビリテーションプロジェクトの短期専門家（言語療法）として、2005年2月25日から3月16日までペドロ・アギレ・セルダ国立リハビリテーションセンターにて言語療法に関する研修を行った。

(1) 2003年の6月 ボバース研究会 ST パートのリーダーから相談を受けて短期派遣専門家派遣事業に参画することとなった。ボバースアプローチを中心とした ST パートの研修プロジェクトであるが、中枢神経系障害児に関する具体的、技術的研究を含めた ST ワークの伝達研修を行うことであった。派遣者は、鈴木と中沢優子さんの二名であった。JICA からの派遣要請を受けて、北海道知事が派遣を決定した。出発に際して、事前打ち合わせを札幌で行った。研修会全体構成をまず立案し、研修内容の検討、研修プログラム、担当部分などについて検討した。JICA では、多額の携行機材、輸送資材が INPAC 病院の ST に提供された。私たちは、綿密に話し合い、指導教材をたくさんリストアップした。しかし、いろいろな不具合が生じた。例えば、以前に提供されたコーティングスプーン、200本が大量に残っていた。機材購入でも、提出した物品リストと異なる物品が含まれていて、予算執行のずさんさが目に付いた。日本でいろいろ推測してリストアップしたものが、現地で必要なものが違っていた。日本と、チリ国ではその重要度が異なるという認識を新たにした。

(2) チリ国 INRPAC の現状と私見：

チリ国の療育の現状は、日本の30年前を彷彿とさせた。しかし、INRPAC 病院のスタッフは皆若く意欲に満ちており、この国の療育を向上させようという気概が伝わってきた。

INRPAC 病院の建物は古く、うなぎの寝床のようにうねうねと広がりお世辞にも明るく衛生的とはいえなかった。私が今まで視察した北欧や中欧諸国の施設と比較すると其の非衛生さには本当に驚いた。しかし、中央に広い庭が設けられていて、日中や夕方には面会にくる家族、特に兄弟姉妹と入院している子どもたちが元気よく遊んでいた。この広い庭で、訪問してくる両親達が其処個々でベンチに座って談笑している姿や入院している子どもと兄弟姉妹達と一緒に遊んでいる場面をよく目にした。この庭の効用を意図的に計画したときいた。アメニティに配慮する視点があることはすばらしいと思った。

外来診療は、小児科、整形外科、歯科、歯科矯正科などが開設されていた。受付から診療、会計まで各科で総て終了する INRPAC 方式のシステムがとられていた。日本のシステムとは異なり少々びっくりした。月曜日の午前中は、総合診療の日で、一度だけ参加した。Dr、ソーシャルワーカー、心理士、

PT、OT、STがチームでクライアント(チリでは、患者さんをこう呼んでいた)に関わり総合評価していた。私は、PT、OT、STパートに参加した。この診療スタイルは、北九州療育センター方式とよく似ていた。

この総合診療のシステムは、日本でも取り入れる必要性を認識しつつなかなか実現できずにいる機関がほとんどだが、実現できていることはすばらしいと思った。

入院病室は、4室だけで、各部屋には8~10個のベッドが入っていた。ちょうど夏休み中で入院児は僅かだった。残留児の多くは養護事情を抱えていた。緊急対応が必要で入院してきた子どももいた。脳炎後遺症で水頭症を併発しシャントが挿入された1歳代の幼児が入院してきた。その子は、ほとんど設備らしいものがない一般病室で、点滴を受けながら懇々と眠っていた。其の病室には、介護人が一人いた。一人で24時間勤務して、担当病室の8~10人の子どものための介護をする体制だった。動き回る子から、全介助の子までを、ある子は、一日中、鼻中カテーテルで経管栄養を受けていた。ある日胸騒ぎがして病室にいくと、ミルクが口からあふれ、呼吸障害を起こしていた。顔色はチアノーゼ状態だった。慌ててスタッフを探し、すぐ対応を変えてもらった。其の日は、何度も同様の状態になり経管栄養を鼻から胃へ注入するスピードが速すぎるのだと介護人が私に訴えた。JICAのスタッフに相談し、STスタッフを通してDrに掛け合ってもらった。すると、翌日には、タンブルフォーム(介護用の椅子名)座って、本人の胃が受けとめられる量に調整されていた。その後、呼吸障害には一度も陥ってはいなかったが、この事件から推測できるように、介護スタッフ、医療設備、医療レベルなど様々な側面から医療ケアのレベルが非常に低レベルであるの一言につきた。リハビリルームは、理学療法室、作業療法室、言語聴覚室があった。理学療法室はとても手狭。作業療法室は、2室に分けられており作業室とプレイルームが区分されていた。言語聴覚室は、個別室が3室、聴力検査室、集団指導室1室で、個別指導室はSTの事務室をかねており、どの部屋も狭く、部屋の中央に机が置かれ子どもが楽しく学習ができる雰囲気もスペースもなかった。聴力検査室は簡易式の検査室が設置され、その外側にオーディオメーターとビジ・ピッチ(音声分析装置)があった。防音状態は劣悪で、正確な聴力評価の観点からは疑問が残ったが、現状では精一杯の環境整備なのだと思う。集団指導室は、いろいろな用具が乱雑に置かれ、プレーセラピーができるようにシートも敷かれていたが土足で、埃っぽく不衛生だった。このことは、現地のSTだけでなく職員全体が衛生に関する意識が希薄なのだと思う。

ST研修は、INPAC病院4人のSTに対して実施した。彼らは、講義、実技伝達、実技実習、治療実習、ケーススタディと熱心に取り組んでいた。STの仕事は、早出での二人は早朝の7時30分から始まり、研修開始の9時までにSTワークを行ってから研修に参加し、研修終了の4時30分まで、真摯な態度で取り組んでいた。研修終了後は、各自のワーク(給料が安いので、アルバイトをするのが慣行であった)で、早出の二人は退庁し、遅出の二人が5時30分の終業のまでSTワークをしていた。研修は、時間が不足だった点が多々あった。摂食障害児に対しては、非常に注意深い対応が必要である点についての説明が不十分であったし、衛生面、誤嚥についても危機意識を持たせられたかどうか不安であった。コミュニケーション障害児に補助的な手段として、VOGA(代替音声補助装置)、sounds & symbols、MAKATONサインなどを紹介して、STとして、一つ的手段に拘泥するのではなく様々な手段を選択してお子さんのコミュニケーションを育ててほしいと思った。指導した内容が実際にお子さん達にどのように反映され、有効であったかを検証する必要があると思った。また、再度、確認し不足している点を補足する作業が残されたと考えた。この反省に基づいて、同行した中沢STがご主人の理解と協力を得て、一年後、シニアボランティアとして、ご夫婦で赴任し、合計3年間にわたってINPAC病院にてチリのST指導に当たった。私が、このお二人の熱意に動かされて、この3年間の間に、ボランティアで2回、チリを訪れた。その都度、INPAC病院にて、JICA、中沢STの企画研修会に協力した。また、現地のSTの実習指導を行った。三度目の訪チリで、中沢STからチリにおける役目は終わったことを告げられ、私のチリにおけるボランティア活動は終了した。2010年9月初旬のことだった。

5) 60歳以降現在まで

札幌療育センターを定年退職した私は、縁あって藤女子大学に赴任した。かねてより親交のあった横路由美子さん（元北海道知事夫人、現衆議院議員夫人）に誘われて、札幌ユネスコが企画したカンボジア識字支援ボランティアツアーに参加した。2011年、2012年の2度、同地を訪れ現地の方々と交流した。

最初の支援ツアーで感じたこと、この次は、カンボジア語に翻訳した絵本を届けたいという思いを持ったメンバーと協働して、夢が実現した経緯を語りたい（なお、この部分は、2012年北海道乳幼児療育研究会にて報告を一部割愛して転載した）。

(1) ユネスコ：カンボジア識字支援ボランティアツアーに参加して

— 2011&2012 2回に参加して —

この企画は、日本ユネスコがアジアにおける識字率の向上を目的にして、開始当初は、バングラディッシュの識字率向上のための支援から始まった。バングラディッシュの教育状況が向上し、次の支援の対象国がカンボジアとなった。カンボジアは、1970年代のポルポト政権時代に、大半の学校が壊され、歴史書・教育に関する書物が焚書され、75%の教師を失うという時代を過ごした。多くのカンボジア国民は、教育を受けることなく成人し、文字が読めずそのために就業もままならないという状態を長い間、耐え忍んできた。今、カンボジアには、各国からの支援によって各地に学校が建設され就学が奨励されている。就学率も上がってきた。しかし、小学6年間の課程を終了できる子はその半数に満たないのが、現状である。日本ユネスコは、この状況に鑑み、支援の軸をカンボジアに移し、現地のカンボジアユネスコと協力して、主に、シェリムアップ周辺の地域に、寺子屋を立てるプロジェクトを立ち上げ支援を開始した。札幌ユネスコは、この支援の一環として、2010年から2012年までの3年間、連続してカンボジア寺子屋研修ツアーを実施した。鈴木は、2011年、2012年の2回この研修ツアーに参加した。この研修ツアーで、アジアの諸国の教育について、その一部であるが多くの示唆を得た。この見聞録、示唆について報告する。

① 2011年のカンボジア訪問

11月20日、朝、kinder-gardenに向けて出発。途中から舗装がなくなり、赤土が舞い、でこぼこ道の悪路の中、マイクロバスで行進した。道路が変わり始めたところから周囲の風景が一変した。高床式の家が増え始めたと思ったら、急激に高床式の住居も、どんどん貧相になってきた。家の柱は朽ち果てて、壁は筵、屋根は藁ぶき、筵といってもいいくらいの藁屋根が多くなった。家の周りは、生活用品や農機具が雑然と置かれ、その周りに牛や犬、猫、鶏も放し飼いであった。牛は、痩せてあばら骨が見える姿であったが、それでも乾期の時に見た牛よりもまるまるとして見やすいと昨年、訪問したメンバーは話してくれた。

この周辺に唯一建設された幼稚園では、われわれ一行は大歓迎を受けた。幼稚園は、平屋造りで広い一間のみ、床はコンクリート、窓ガラスがはまっていない大きな窓があった。室内には、大きめのテーブルが一つあり、そこに教材がのっていた。中央にプラスチック製の幼児用のイスが15、6個並べられていた。私たちは何の疑問も持たず靴を履いたまま入室したが、現地の先生は裸足でコンクリートの床を歩いていた。間もなく、子どもたちが三々五々やってきて、先生の指示でイスに座った。靴を履いている子と裸足の子はおおよそ半数くらいであった。子どもたちの洋服は、どの子も一張羅の綺麗な服を着てきたのかと思うくらいござっぱりとしていた。5、6人の子どもが、新品で同じ形の白いブラウスを着ていて、それ以外の洋服を着ている子どもたちとの違いが際立っていた。私たち一行が来るというので、お仕着せの一着でなかったかと推察した。

先生が授業を開始した。朗々とした大きな声で名前を呼び、その後、自由遊びをした。ままごと遊びであったが、ままごと道具はほんのちょっとで、日本の幼稚園とは大きく違っていた。やがて、歓迎の

会が始まり、私たちは横路さんのリコーダーにあわせて「蝶々」を歌って踊った。それから「汽車」を歌いながら、校舎の周りを汽車になって回った。どの顔も生き生きして笑顔にあふれていた。同行の北大生が、風船で動物をこしらえて大好評であった。

私たちは幼稚園をあとにして、地雷博物館を訪れ、国家間の政争の結果、多くの人々が手足や人命を失ったこと、今、なお国境沿いには多くの地雷が埋まっていてそれを除去するにはまだ、100年かかるときいて衝撃を受けた。そして、地雷によって手足を失った方たちの作業所を訪れた。「飛んでけ車椅子」のメンバーから託された車椅子を届けた。

翌日、カンボジアユネスコを表敬訪問し、カンボジアにおける識字率がなぜこんなに低いのかという理由を館長から講義を受けた。講義は、今、子どもたちだけでなく青・成年も含めたカンボジア人の識字学習がどのように取り組まれているか、カンボジアの貧困の現状、それを克服するための職業訓練の取り組み、そここの集落が集まって、学校兼図書室兼公民館……いろいろな役割を兼ねた建物を、お金を出し合って建設し、運営をしているという内容だった。最後に、彼は、他国の施し入らない、自分たちが立ちあがり自立していく過程を応援してほしいと結んだ。夕方、実際に、夜開学している寺子屋を視察した。多くの子どもたちが、星明かりを頼りに学校を目指してやってくる。教室は、机が二列に並んでいて、一列は、子どもたちが、二列目列には、大人たちが座った。どの子ども、どの大人も、先生の授業を食い入るように見つめ、私語や騒ぐ人は一人もいなかった。どの子ども、どの方も真剣な表情で、心に響いた。この寺子屋は、日本ユネスコの支援を受けて、この地域のカンボジア人が委員会を設立し、資金を集め運営を担当していること、教師たちは、若い地元の女子高校生が中心であること、この寺子屋が、地域の公民館の役割も果たしていることもうかがった。何も無いところから懸命に立ち上がり取り組んでいる姿勢に襟を正される思いがした。

② 2012年のカンボジア訪問までの1年間

訪問の前に私たちは、前回の訪問からいくつかの学びを得ていた。その一つは、子どもたちが読む絵本がとても少ないことであった。ユネスコの集まりで、子ども達にカンボジア語の絵本を届けたいという意見に賛成の声が上がり、2万円の予算が付いた。そして、鈴木に具体化してほしいという話がきた。絵本を翻訳するのに、2万円で翻訳してくれる人がいるとは思えなかったが、友人に相談すると、北大にカンボジアの留学生がいるから当たってみなさいというアドバイスを貰った。北大の留学生センターの教授に、趣旨を説明するととても好意的に対応してくださった。お返事はすぐ来た。留学生は、薄謝であってもやりますと言ってくれた。しかし、日本語をカンボジア語にすることはできない。英語であれば、カンボジア語に翻訳することができるという話であった。日本の絵本を英語に翻訳するのは、とてつもない語学力が必要である、この難問をどうすればよいかと悩み、件の友人に再度、相談したところ友人がボランティアで翻訳してくれると言ってくれた。そこから、話しは急展開した。絵本の選定には、絵本作家の柴村紀代先生が参加してくださった。30冊くらいの絵本を候補に挙げ、その中から翻訳してくれるボリスさん、ラムライさんに絵本を選考してもらった。7冊の絵本が選ばれた。この7冊の絵本を、友人の渡辺典子さん（駿台予備校の英語教師）がまず、英語に翻訳してくれた。そして、二人がカンボジア語に翻訳した。この間に、絵本作家や出版社に了解を貰い、現地に持参する絵本を購入し、翻訳した物を絵本に貼る印刷されたシールを用意し、シール貼りをした。絵本の中には、すでに絶版になっている物もあった。やむえず、カラーコピーをしてその上にコーティングして紙芝居仕立てにした。この作業を、札幌ユネスコの寺子屋ツアーに参加する主要メンバーが取り組んでくれた。総てが完成したのは、出発直前であった。出来上がった絵本と、紙芝居は、数10キロの重さになった。かかった費用は、翻訳料が2万円（1人1万円）、絵本とカラーコピー代、コーティング代など、結局10万円かかった。赤字分は、いろんな人からカンパしてもらって調達した。私の、辛口の友人は、「2万円の予算でそんなことができるはずがないと思っていた。でも、いろんな知恵や人の協力のできることもあるんだね。」としきりに感心していた。

私たちは、絵本を現地に届けるという企画を1年かけて達成した過程を通して、人の輪を作り、仲間

意識を強くした。こうして、出来上がった絵本やそのほかの現地に届けるプレゼントを持って出発した。

③ 2012年のカンボジア訪問

11月21日、カンボジアのシェリムアップに向けて出発した。

翌日から、ノエルの寺子屋訪問、カンボジア事務所の表敬訪問、水上の寺子屋訪問、ADDに車椅子を届けて、最終日は、アンコールワットの観光で全日程が終わった。

ノエルの寺子屋訪問では、午後4台のジープに分乗して、地元ではダンシングロードと呼んでいる悪路を走りノエルについた。途中、水が道路のすぐ際まであるところがあり、雨季から乾期への移行期には、このような洪水状態となると聞いた。今回も、洪水のため橋が落ちて、マイクロバスでは行けなくなり、急遽ランドクルーザーに乗り換えることになった。今にも、道路からはみ出して泥水の中に落ちるのではないかとひやひやしながらの道中だった。やっと到着したときには、ほっとした。ノエルの公民館兼寺子屋では、大勢の子どもたちや村人が集まっていた。整然と整列をした子どもたちが、幼児から中学生くらいまで、おそらく100人はいたと思う。

村長の歓迎のあいさつの後、子どもたちによる歓迎の演奏が行われた。婚礼の時に演奏される祝い歌とカンボジアの楽器演奏が調和して、おごそかな旋律を奏でていた。(後で、聞いたところによると、婚礼に招待され演奏すると結構高額の謝礼がいただけ、この収入も経済的な自立に向けた大切な収入源なのだ)。

私たちの代表のあいさつ、それに続く歓迎の演奏の間、子どもたちは、整列してじっと立ったままだった。なんてお行儀がいいのだろうと感じたのは、私ひとりではないと思う。そのうち、この炎天下の中、立っているのはさぞつらいだろうと感じ、夕方の寺子屋が始まるまでの数時間、なにがしかのレクリエーションを急遽することにした。

一緒に行った若者たちに呼び掛けて、歌を歌ったり、踊ったりして子どもたちと交流した。子どもたちは疲れを知らず、へとへとになったが、子どもたちとはノンバーバルな心と体の交流がたくさんできた。お土産に、不要になったカスタネットやタンバリンなどの楽器、風船、ボール、子ども用のサンダル(100円ショップで購入した)、カンボジア語に翻訳した絵本などを贈った。ボールは、ボール投げをして、楽器は、子どもたちと歌いながら楽器を鳴らすのに、早速、使った。絵本は、地元の方に読んでもらった。寺子屋在籍児以上に子どもたちが集まり、持参した夏用のサンダルが足りなくて、子どもたちに悲しい思いをさせたのではないかと気にかかったが、この件は、帰国前夜、通訳の方の助力を得て市場で大量に購入し、子どもたちに届けることができた。団長、副団長の思い切った判断と決断だった。ノエルでは、井戸を二台、ソーラーパネルを一式寄贈した。これで、綺麗な水と、子どもたちが明るい光の中で学べるなど嬉しく思った。

22日、水上寺子屋を訪問した。途中、メコン川を船に乗って、水上レストランに向かった。乗船すると8、9歳くらいの男の子二人が出迎えてくれた。通訳の方の話では、子どもたちは、学校どころか生活ができないので、乗客の用事を足して駄賃を貰い、そのお金を生活の糧にしているので、彼らの働きが気に入ればチップをあげてほしいといわれた。水上を走る船の道中、女の子が缶ジュースを籠にたくさん入れて乗り込んできた。どうやって乗り込んだのかとビックリした。みると、行きかう船から船へと物売りの子どもが、移動していた。蛇を首に巻いた子どもと母親を乗せた船が、客船に近付き物乞いをしている。水上レストランのそばには、同様の船が何艘も停泊していた。水上生活者の母子の姿だ。こうやって日がな一日、旅行者からの喜捨を頼りにして暮らしていた。通訳の方は、安易な同情からお金をあげないでほしい、自分で立ちあがっていく気力を無くしてしまうからトリキを入れて話された。

水上レストランでは、ワニがたくさん飼われていた。このグロテスクな生物をながめながら、トイレに行った。ドゥポントイレと聞いていたので、思ったより、綺麗でホッとした。食事は、何とか食べたが後で下痢するのでないかと不安だった。

このレストランで昼食の後、目的の水上寺子屋へ行き、大歓迎を受けた。持参した絵本と紙芝居を、早速、寺子屋の先生が子どもたちに読んできかせた。子どもたちが目を輝かせて聞いているのを見て、

この翻訳した絵本と紙芝居を用意するまでの長い苦勞が報われたと実感した。

7、8歳の子どもたちは立派な働き手だった。この子どもたちが、夜、読み書きの学習に、寺子屋に通ってくる。日本の子どもたちとの違いに呆然とし、子どもたちの育ちについて考える場をもらったと感じた。

最後の訪問先、ADD（地雷で足を失った方達の作業所）に、今回も「飛んでけ車椅子」から託された車椅子を3台届けた。車椅子を待ち望んでいた方は、とても喜んでくれた。しかし、一方で、以前に届けた車椅子が、車輪がパンクしても修理ができないので切断して他の車輪が付けられているのを目撃した。私たちは、車椅子を届けるだけでは駄目なのだと実感した。パンクを修理する技術やそのための道具を届けること、スペアタイヤも必要なのだということが分かった。何度も送り届けることで、現地のニーズや課題が理解できるようになるのだと思った。

旅の終わりに、晩餐会をした。この旅の通訳の方も同席した。彼は、日本語を週一回、集団で教える場所に働きながら通い、日本語通訳の資格を取ったのだと語った。彼自身が、努力して現在の資格や仕事を得たこと、インターネットなどで現在も日本語を読む勉強を続けていることを聞いた。また、どうしても出せない発音についても話してくれた。私は、STとして、彼にサ行、ザ行の出し方を教えた。何度か繰り返していくうちに、綺麗な音が聞かれるようになった。カンボジアの方に自分の専門技術が役に立って嬉しかった。

この旅の終わりに、私たち一行を乗せたバスの中で、通訳の方が私たちに、「私たちカンボジア人のために日本から支援に来て下さったことを、カンボジア人の1人として、心から感謝いたします。ありがとうございました。」と述べた。私は、この立派な挨拶に心打たれた。

彼は、働いて生活を支えている子どもたちに対して優しくかった。怠けて、金持ちや外国人の喜捨を当てにして暮らしを立てる同胞には、辛辣な批判をしていたことを思い出した。彼に、団長達が、持参したサンダルが足りなくて、現地でなんとか皆さんに届けようとしていた姿や大汗をかいて、子どもたちと一生懸命、交流していた様子などなど、私たちの熱い思いが伝わったのだと思った。人と人をつなぐ輪は、互いに理解しようという気持ちの上で成り立つのだと改めて自覚した。人の心は国境を越えると腹にズンと響いた。

(2) ベトナム：TUZU 病院におけるボランティア

2013年2月、ベトナムの障害児を持つ人々のために長年にわたって支援を続けているグループの要請を受けて、ホーチミンにあるTUZU病院で、脳性麻痺児病棟「平和村」で摂食研修会を行った。ベトナムのTUZU病院は、ベトナム戦争で撒かれた枯葉剤の影響を受けて多くの奇形児が誕生したが、その中でも、ベトちゃん・ドクちゃんが収容され治療を受けた病院として有名である。この病院の一部「平和村」のニーDrが中心となって、脳性麻痺の子どもたちの食事についての研修会を企画したものであった。

このボランティアはひょんなきっかけで始まった。前述したベトナム支援を続けている知人に、暇ができれば私も参加してみたいと言漏らしたことがスタートだった。どうせボランティアに来るのであれば、郊外の在宅訪問でなくてTUZU病院で、摂食に関する研修会をしてほしいと知人がいいだした。ニーズがあるのかと問いただすとニーズはあるという。それであればということになって、「ギャラなし、旅費も滞在費も自分持ちだけれど、一緒にやってくれないか」と東京のST、森永京子さんに相談した。一緒に行ってもいいという返事をもらった。森永さんは、7月末に、まずベトナムにボランティアで行くので、TUZU病院を訪問して、実態やニーズを調査してくるということになった。

この調査に基づいて、私たちは準備にかかった。摂食講習会を受講する専門職種及び、現地の子どもたちの状態、食事内容や介助法、道具等についての洗い出しから始めた。その結果、非常に初歩的基本的な事柄をまず伝えることに目的を絞りこんだ。

講習内容の検討は、日本の初級講習会よりもさらにゆったりとしたペースで、視覚教材、実習を多く取り入れ、かつグループディスカッションと報告を取り入れることにした。

そのための初心者用パワーポイントを作成した。次いで、そのパワーポイントに関する修正、変更のための会議をメールのやり取りに加えて、東京で2回持った。

視覚教材を多用するために、大判の人体図などを作成した。顔面の断面模型も持参することにした。既存ビデオも準備した。試食用の食材、展示用の自助具（スプーンやマットなど）も準備した。この準備におよそ7カ月間かかった。いよいよ出発という直前になって、また、新たな問題が起きた。TUZU病院のニーDrから、講習会メンバーに対して写真入りのパスポートのコピーを送ってほしいと言ってきた。ベトナムは共産圏であり、これまでも様々なトラブルがあったことを聞いていたので、顔写真入りのパスポートナンバーを送って、もし、不正流用されることはないのか、もし万一、拉致されるようなことになったりしたらという不安に掻き立てられた。いろいろな人に相談し、不安を払拭できないままいままさら後には引けない、多くの方に迷惑をかけるという思いで見切り発車をすることにした。こうして2012年2月下旬、私たちは出発した。ホーチミン空港に降り立った私は、余りの暑さに、これがベトナム南部の2月下旬の気候なのだ実感した。

隣国のカンボジア、シェリムアップに降り立った時は、おだやか中にも温かな静けさがありどこかに人をほっとさせる雰囲気があった。ホーチミンは、空港の入口から人が溢れかえり、ともかくけたたましく騒々しかった。必死でタクシーを拾いホテルに到着したときには本当にホッとした。翌日、TUZU病院に出かけた。TUZU病院は、小児の総合病院で、私たちが研修会を依頼されたのは、「平和村」と呼ばれている障害児の収容病棟であることがわかった。TUZU病院の中には、小児のリハビリ科があり、PT、OTが配属されていたがSTはいなかった。後で、聞いたところによると、この国にはSTの養成校はないということであった。私たちは、まず、「平和村」を視察し、どのような子どもたちが入院しているのか、食事はどんなものを食べているのか、食具はどのようなものを使用しているのか、食事のテーブルと椅子はどのようにセッティングされているのか、食事の風景などを観察した。「平和村」には、食堂がなかった。廊下に長テーブルが一つ壁につけて置かれていた。病室は3室あって、どの病室にも高い柵つきベッドが並んでいたが、絵本や遊具らしいものはほとんどなかった。ディールームのような空間もなかった。職員トイレは鍵がかかっていた。浴室やトイレは何処にあるのかわからなかった。調理室は結構大きい空間が取ってあって、そこで食事の準備や職員の食事が摂られていた。入院している子どもたちは、脳性麻痺だけでなく、奇形やダウン症、水頭症、アルトログリボースなど様々な肢体不自由の子どもたちがいた。重度の脳性麻痺児は、ほとんどベッドに寝ていた。それ以外の子どもたちは、学校に行っていたり、職員のまわりをうろうろしていたり、手伝いをしていたりしていた。食事は、朝食はかなり早く、昼食は、11時くらいには始まるとのことだった。私たちは、この食事を見学することにした。食事は、一斉に取るというよりは、個々それぞれに、いたるところで取っていた。ダウン症の女の子は、ベッドのそばの小児用の椅子をテーブルにして大きなスプーンで掬って口に入れていた。周りには、誰もいない一人ぼっちの食事だった。長テーブルの周りには、てんでに子どもたちが陣取り、ここも人はたくさんいるのに、子どもたちは、1人で黙々と食べ物に口を運んでいた。ベッドでは、重度の子どもたちに職員が食べさせていたが、姿勢や一口量に余り配慮がなされていなくてよくむせていた。

食事は、普通食、ドロドロ食、トロトロ食の三段階に調理されていた。ドロドロ、トロトロ食は、総ての献立を混ぜ合わせてしまうので、どんな味かと想像するだけで食べる気力を無くしてしまいそうだった。この食形態でどの子にも当てはめていた。食具は、大きいボールと大人用スプーンで総て統一されていた。

研修会に予定されていた部屋は、冷房がきいた応接室であったが非常に狭かった。受講予定者は、延べ数で40、50人、常時、34、5人という話であった。通訳は、ニーDr1人だけであった。

この現状から、明日以降の食事の研修会をどう組み立てるか、再度話し合いがなされた。講義は、どのくらいの内容を、どのくらいのスピードで展開するか、用意してきたものをどう使用していくか、現地ですぐ応用して展開できるようにするためにはどうしたら良いのかなどについて討議した。

21日、22日の二日間で、再度、講義・実技・グループディスカッションを組み立てた。

現地で、強調した事は、食事はみんなで一緒に食べたほうがおいしい。食事をするときには、良い姿勢で食べないと誤嚥しやすいので、姿勢の工夫が必要である。一回の摂取量は、子どもの体の成長と関係する。一口量は、多すぎると食べづらい。子どもの口の大きさにあったスプーンを使用したほうが食べやすい。この3点であった。研修会には、各科から多くのDrが参加された。特に、トップのDrは私たちの講義を熱心に聞いてくださり深い理解を示された。研修会の終了時には格別の感謝の言葉をいただいた。その夜、この二日間の研修会をねぎらって、TUZU病院では、夜に食事会をしてくださった。私は、ベトちゃん・ドクちゃんて有名なドクちゃんの隣に座って彼から特別なサーブを受けた。ドクちゃんは、日本で体を切り離す手術を受け日本語が堪能だった。ガラスの鍋に入れられた生きた大エビに、その場で焼いて食べる料理を実演してもらって、それをどうやって食べるのか、ドクさんは丁寧に教えてもらって、エビをたくさん食べた。とても美味しかった。あれから、半年、8月に友人は再びTUZU病院を訪れた。「平和村」では、テーブルを囲んで子どもたちが食事をしていたこと、大きなスプーンはその子に合った小さなスプーンに変わっていたことを教えてくれた。まだまだ、たくさんの課題はあるが大きな一歩を踏み出していることを実感させられた。

結び

十代後半から現在に至るまで、半世紀にわたる私のささやかな活動を振り返った。思い返すと、活動が続けてきた原動力は多くの人との出会いであった。学生時代に大木さんに出会わなかったら、ボランティア活動に踏み込むのは、もっと多くの時間が必要だったのでないかと思う。この最初のボランティアをきっかけに、クリスチャンセンター家庭相談室でのボランティア、そして、そこでの体験が、教育大学専科の進学へとつながった。教育大学で出会った同窓の方々や入職に導いてくださった恩師がいなければ、札幌療育センター入職もなかった。手も足も出ない私を支えてくれたのは、子どもたち、お母さんたち、そして職場の仲間、恩師であった。それがなければ、志を同じくする道内、道外のSTの先輩、仲間たちとの出会いもなかったと思う。失意の時には、不思議と救いの手が差し伸べられてきた。一縷にその糸にすがって急場を切り抜けてきた。人は、いつでも何処でもちょっとしたことで人に足をすくわれたり、裏切られたりする。こうしたほうがよい結果を生むとわかっている、組織の中では思うに任せないことがたびたびある。難しい障害に出会い実力の足りなさに心が千切れそうになる時もある。激しい自己嫌悪に駆られる時もある。そんな時には、いつも出会ってきた子どもたち、お母さん、友人、恩師のことばや顔を思い出した。うずくまっても、もうだめだという自縄自縛の罫にはまらなかった。

人との出会い、そして、私でもなにかできるものがあると感じさせてもらえてきた。すると不思議と力が湧いてきた。仕事、人との出会い、ボランティアは三位一体で私の人生を伴走してきたといってもいいと思う。今後も、多分この行き方を続けていこう。

今回は、年代に添って単発で活動してきたことを中心にまとめてみた。いつか、機会があったら私の人生の核ともなった2つの活動についてまとめてみたいと考えている。